21、念々称名常懺悔

善導大師は念々称名常懺悔と仰ってあるが又反面、称々念々常歓喜でなければならない。往生礼讃の四得十三失の所で味わって見れば、二種深信を顕して、「自身は是煩悩を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す、今弥陀の本弘誓願は名号を称すること下至十声一声等に及ぶまで往生を得しむと信知して乃至一念も疑心あることなし、これを深信という」と。堕ちる者だがお助けと、聞いて信じて合点して自分で上がるのでなく、徹底した悪を照らし出されて、往生の望みの絶えた私が下々品の機であり、それが声なき声に生かされた一刹那、信の一念を等（下中品）と言う文字で顕し、一声称名を発した行の一念を一声（下上品）で教え、相続した十声（下々品）の称名は命延ぶれば自然と多念に及ぶ乃至十念の称名なることを述べて、称名の多少によらず大悲の徹底した一刹那に往生の業事成弁し、仏凡一体、機法一体、信楽開発、現生不退、若し上の如く念々相続する者は十は即ち十生

れ、百は即ち百生る、これを御文章に「一念の信定まらん輩は十人は十人ながら百人は百人ながら」と仰せられたので一念の信の鮮やかに諦得の出来ない者は、往生は不定である。その往生の理由を挙げて四得を示してあるのだ。「何を以ての故に（一）外の雑縁なくして正念を得たるが故に、（二）仏願に相応するが故に、（三）仏教に違せざるが故に（四）仏語に随順するが故に。

祖師聖人はこれを御和讃に

利他の信楽うるひとは　願に相応するゆえに
教と仏語にしたがえば　外の雑縁さらになし

誰も彼もが此の機に用事はないと言っているが、用事がなければ説教聞くな、三仏を生かすも殺すも自分の心一つにあるのだ。この渋太い奴性根を生かす為に、開発さす為に十劫（願）已来立ちづめではないか。後生とも菩提とも思わぬこの腑抜けに活を入れる為の八千遍（教）の釈尊の御苦労となったのではないか。この眼も当てられぬ鈍根無智に　明るい感謝を與える為に舌切り仏になってもよいと証　誠護念（仏語）して

下さってあるのではないか。それにこの機に用事はないとは、馬鹿も休み〳〵言え。嗚呼真宗の道俗よ、感情の猿に瞞されて、第二十願の法頓根漸の桁を離れ切らないのかい。それだから心々相続無他想間雑にならないのだ。それでは雑修十三失の域を離れ切らないから念々称名常懺悔にならないのだ。

二種深信が徹底して念々相続する者は仏智が満入しているから、煩悩の動いている処は悉く光明に照らされて見せつけらるるのだ。信前も信後も、何時でも、何処でも地獄一定なのだ。だから見抜かれておりながら噴き出る悪性、随犯随懺、随懺随犯、毎日繰返す称名の儘が懺悔となっているのだ。機に向えば常に懺悔であるけれども、法に向えば常に歓喜でなければならないから、称々念々常歓喜と言ったのだ。堕ちる処は無間のどん底、登る処は五十二段、私を離れて弥陀がない、弥陀を離れて私がない、堕ちて満足、上がって不思議、懺悔して卑屈に流れず、歓喜して高慢とならず、恵まれ過ぎていることを感謝せずにはいられない。

然るに真宗の道俗でありながら　悔い改めよの教えでないから懺悔する必要はない

とか　歎異鈔の第九節にも喜ばれないと教えて有るように凡夫は喜ばれるものではない、喜んで行かねばならぬのなら歓喜正因になると　気のきいたような間の抜けたような教をする人がいるが、畢竟信仰が徹底していないからこの言葉が出るのだ。悪を悪とも知らず業を業とも知らずにのさばりかえっていた逆謗闡提の法龍が無条件で摂取された時、大地にしがみついて懺悔せずにおれるか。悪鬼羅刹の法龍が、大地微塵劫を超過すれども苦患を免れ得ない法龍が大般涅槃を超証する約束を諦得した時、天地の揺らぐ慶びがなくていらるるか。

和讃には

真心徹到するひとは
金剛心なりければ
三品の懺悔するひとと
ひとしと宗師はのたまえり

と、又信巻には

「一念といふは信楽開発の時刻の極促を顕し広大難思の慶心を彰はす」

と仰せられてあるではないか。徹底した懺悔には徹底した歓喜がある。お言葉の真似をしている者に何の歓喜や懺悔が有り得よう。日々が懺悔であり、日々が歓喜である。光明に照らされたから懺悔となり、寿命に生かされたから歓喜となるのだ。